

2022年5月15日(日) 7課 使徒言行録 22章30～23章11節

週題: 「神の前で、人々の間で」

暗唱聖句: その夜、主はパウロのそばに立って言われた。「勇気を出せ」

使徒言行録 23章 11節

22:30 翌日、千人隊長は、なぜパウロがユダヤ人から訴えられているのか、確かなことを知りたいと思い、彼の鎖を外した。そして、祭司長たちと最高法院全体の召集を命じ、パウロを連れ出して彼らの前に立たせた。

23:1 そこで、パウロは最高法院の議員たちを見つめて言った。「兄弟たち、わたしは今日に至るまで、あくまでも良心に従って神の前で生きてきました。」

23:2 すると、大祭司アナニアは、パウロの近くに立っていた者たちに、彼の口を打つように命じた。

23:3 パウロは大祭司に向かって言った。「白く塗った壁よ、神があなたをお打ちになる。あなたは、律法に従ってわたしを裁くためにそこに座っているながら、律法に背いて、わたしを打て、と命令するのですか。」

23:4 近くに立っていた者たちが、「神の大祭司をののしる気か」と言った。

23:5 パウロは言った。「兄弟たち、その人が大祭司だとは知りませんでした。確かに『あなたの民の指導者を悪く言うな』と書かれています。」

23:6 パウロは、議員の一部がサドカイ派、一部がファリサイ派であることを知って、議場で声を高めて言った。「兄弟たち、わたしは生まれながらのファリサイ派です。死者が復活するという望みを抱いていることで、わたしは裁判にかけられているのです。」

23:7 パウロがこう言ったので、ファリサイ派とサドカイ派との間に論争が生じ、最高法院は分裂した。

23:8 サドカイ派は復活も天使も霊もないと言い、ファリサイ派はこのいずれをも認めているからである。

23:9 そこで、騒ぎは大きくなった。ファリサイ派の数人の律法学者が立ち上がって激しく論じ、「この人には何の悪い点も見いだせない。霊か天使かが彼に話しかけたのだろうか」と言った。

23:10 こうして、論争が激しくなったので、千人隊長は、パウロが彼らに引き裂かれてしまうのではないかと心配し、兵士たちに、下りていって人々の中からパウロを力ずくで助け出し、兵營に連れて行くように命じた。

23:11 その夜、主はパウロのそばに立って言われた。「勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証ししたように、ローマでも証しをしなければならない。」

● ショートメッセージ

(文責・K.G)

先週は、パウロが第3回宣教旅行において長く滞在したエフェソを離れ、エルサレムへと向かう場面からショートメッセージが語られました。そこから、本日の箇所に至るまでに、まず人々がパウロのエルサレム入りを止めようとする、という出来事がありました。21章の前半では、「弟子たち」が繰り返しパウロを止めたり、アガボという預言する者が警告したり、使徒言行録の著者自身が土地の人々と一緒になってしきりに頼んだり、という様子が記されています。それに対してパウロは「主イエスの名のためならば、エルサレムで縛られることばかりか死ぬことさえも、わたしは覚悟しているのです」と返答します。「“霊”に促されて」(20:22) エルサレムへ行くパウロには、強い使命感と覚悟があったのです。

エルサレム到着後、イエスさまを主とする兄弟たちはパウロを歓迎し、また人々の誤解や攻撃を避けるための策も用意していました(21:17-26)。しかしそれでも、興奮したユダヤ人たちがパウロを捕らえ殺そうとしたため、千人隊長が事態の制圧に乗り出しました。

ここまでパウロがユダヤ人から攻撃される理由は、異邦人への伝道が受け入れ難いことと、パウロが律法を軽視していると見なされたことが、主なものです。パウロはまず群衆に対し、自分もかつてはキリスト教徒を迫害していたこと、ダマスコでの回心のこと、そして主の命によって異邦人伝道を始めたことを語りました。しかしこれらの話は群衆をより怒らせるだけに終わりました。イエスさまを主と受け入れていない人たちにとって、イエスさまと出会って回心したとか、イエスさまの命によって働いたとかいったことは、全く心に響かないでしょう。逆に言えば、イエスさまを受け入れていれば、このパウロの演説は全く違って聞こえたはずなのです。パウロ自身がそうであったように、イエスさまと出会い、弟子として歩む人生を選び取ることが、いかに人生を大きく変えるものなのか、よく分かります。

本日の箇所は、これらの出来事の翌日で、最高法院が舞台となります。この場はパウロが危険人物かを見定める場だったと言えますから、パウロは自身が潔白であり、ユダヤ人たちが騒いだことは不当である、と主張すれば身の安全を守れました。そのためには自分が律法を重んじているとアピールすることが近道でしたが、パウロが開口一番言ったことは、「わたしは良心に従って神の前で生きてきた」でした。

パウロは書簡も含め、この「良心」という言葉をよく使います。日本語では、善悪を見極める個人的な思考を意味します。しかしパウロは「私は、神に対しても人に対しても、責められることのない良心を絶えず保つように努めています」（24：16）といった言葉が表す通り、人はもちろん神の目に正しい行いを選び取る心を「良心」と呼んでいます。これは、自らの力で獲得するものではなく、信仰によって与えられるものです。「律法に従って神の前で生きてきた」なら大祭司らの印象も違ったでしょうが、パウロは「良心」という言葉を選んだために、余計に立場を悪くしました。パウロにとって自分と神さまを取り持つのは律法ではなくイエスさまであり、仕える相手もイエスさまです。この後、パウロが意図的に言葉の中に滲ませている通り、律法の存在自体を否定しているわけではありません。ただ、信仰生活の根本に何を据えるかが、これまでのユダヤ人の考え方と全く違っていたのです。

私たちも、当時の律法のように「これを守っていれば、神は認めてくださる」と思えるようなルールがあれば、信仰生活における葛藤は少なくなっただけかもしれません。しかし、パウロが決してぶれなかったように、私たちはイエスさまが伝えた福音によって救われた者であり、イエスさまの執り成しによって神さまと向き合うことが許されています。私たちの弱い心では、イエスさまの言葉が十分に理解できず心が迷う時もありますが、ある時はひとり静かに祈ることで、ある時は主にある家族と言葉を交わすことで、少しでも御心に近づき、「良心」が与えられることを求め続けるのです。

パウロがファリサイ派・サドカイ派の間に論争を起こしたことは、身を守るために神さまからいただいた知恵でした。何せ一言目から相手側の心象を悪くしていますので、このまま信仰に基づいた主張を続けていたら、処罰されていたかもしれません。あえて場を混乱させる策士ぶりは、痛快といえば痛快です。

が、それだけ「復活」を受け入れられない人たちがいる、という現実をも示しています。11 節で主が「勇気を出せ」と語られていますから、さすがのパウロも少し不安を覚えていたのでしょう。それでも、主の命に忠実に従うパウロはこの後、あらゆる困難を経験しつつもローマへと赴くことになります。

パウロの力強い宣教の旅路は、常にイエスさまが寄り添われたからこそ、成し遂げられたものでした。私たちもイエスさまから良心を与えていただき、真っすぐに信仰生活を歩んでまいりましょう。そしてイエスさまから勇気をもいただいて、それぞれに託された伝道の業に励みましょう。

● 分かち合い

- ・信仰を得る前と後で、物事の考え方や、困難との向き合い方に変化はありましたか。
- ・常に「良心」をもって生きるために、どのようなことが大切だと思われますか。

● 次週の予告

「鎖につながれながら」と題して使徒言行録 26 章 19～32 節から読みます。今週の「聖書日課と分かち合い」で、日々み言葉をいただきます。